

鳥取県日吉津村における母乳栄養推進阻害要因の検討 ——母親および母親をとりまく環境の分析を中心に——

矢倉紀子 植地正文* 中西史子**

Noriko YAKURA, Masafumi UECHI, and Fumiko NAKANISHI

An analytic study on the factors which hinder the breast milk feeding in Hiezu, Tottori prefecture ——focusing on mother and her surroundings——

1970年代に入って母乳哺育の重要性が再認識され、母乳栄養推進のための運動が全世界的に展開されているにもかかわらず、わが国においてはその効果が十分に上がっているとはいえない。母乳栄養推進を阻害している要因には母乳そのものに関する問題、児および保育環境に関する問題、母親および母親をとりまく環境に関する問題などがあげられよう。これら要因の分析を行うことが、今後の母乳哺育の推進運動をすすめる上で重要なことであろうと考える。

今回は母乳栄養推進の阻害要因のうち、母親および母親をとりまく環境に関する問題にしばってアンケート調査を行い、若干の知見をえたのでその成績を報告する。

調査対象および調査方法

調査地区は鳥取県西部に位置し、人口2,677人(昭和58年10月1日現在)であり、昭和54年から昭和58年の平均出生数は32.4人(全員施設分娩)であった。昭和59年11月から12月にかけて乳幼児健診にこられた母親からアトラダムに50人を選び、聞きとり調査を実施した。

結 果

1. 対象の分析

対象の年齢分布は23～36歳(平均28±3.4歳)の50人であった。初・経産別は初産：経産=24：26(1：1.1)ではほぼ同数であった(図1)。母親の学歴については短大・大学卒、中学・高校卒の2群において比較すると、20歳代の母親では短大・大学卒群が41.7%、30歳代の母親では短大・大学卒群が7.1%であった(図2)。

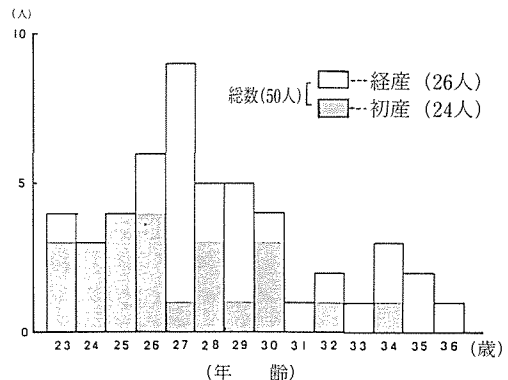


図1 母親の年齢と初・経産別との関係

看護学科

* 東京警察病院

** 鳥取県西伯郡日吉津村役場

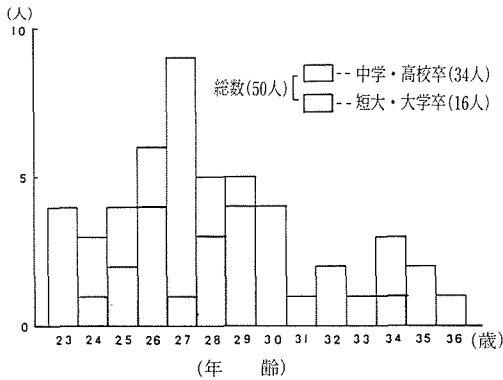


図2 母親の年齢と学歴との関係

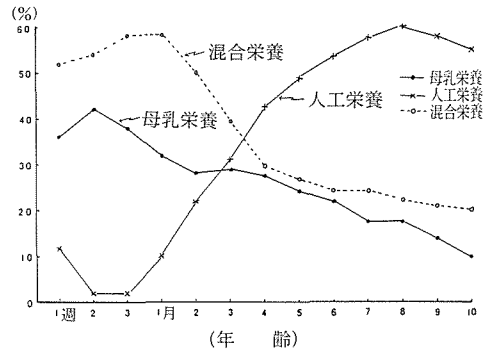


図4 各種栄養法の月齢別推移

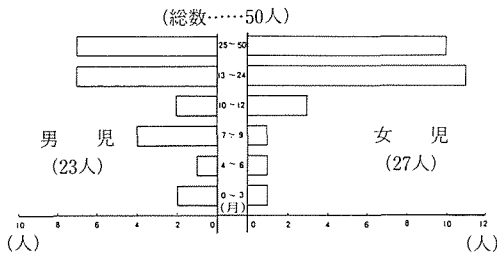


図3 児の性別・年齢別分布

児の性別・月齢別分布をみると、月齢は生後0～3カ月3人、生後4～6カ月2人、生後7～9カ月5人、生後10～12カ月5人、生後13～24カ月18人、生後25～50カ月17人で生後24カ月までの児は全体の66%を占めていた。また性別は男：女=23：27（1：1.2）であった（図3）。

2. 各種栄養法の月齢別推移

対象者すべてに月齢別栄養法を回顧させて調査したら以下ようになった。

母乳栄養率は生後2週の42%をピークに、その後は月を追うごとに減少し、生後3カ月では29.2%、生後6カ月では22.2%となっていた。人工栄養率は生後1週で12%あったものが2週で4%、3週で4%と減少し、その後は逆に増加の一途をたどり、生後3カ月では31.2%と母乳栄養率を追い越し、生後6カ月では53.4%、生後8カ月では60%にも達していた（図4）。

3. 母乳中止時期とその理由

母乳中止の時期をみると、生後1週で50人中6人(12%)がすでに人工栄養に切りかえており、以後もふえつづけていた。ことに生後2カ月から4カ月には母乳を中止した人が16人(32%)もいた。母乳を中止した理由としては表1に示すように、乳汁分泌不良が26人

表1 母乳中止時期とその理由（複数回答）

| 理由 | 1W | 2W | 3W | 1M | 2M | 3M | 4M | 5M | 6M | 7M | 8M | 9M | 10M | 計 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|
| 仕事 | 2 | | | 1 | 2 | 1 | 1 | | | | | | | 7 |
| 美容上 | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 児の好み | | | | | | 1 | 1 | | | | | | 1 | 3 |
| 体重増加不良 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 乳汁分泌不良 | 1 | | | 2 | 6 | 4 | 6 | 2 | 2 | 2 | 1 | | | 26 |
| 乳房の異常 | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | 3 |
| 母の病気 | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 児の病気 | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | 3 |
| 実人数 | 6 | | | 2 | 6 | 4 | 6 | 2 | 2 | 2 | 1 | | 1 | |

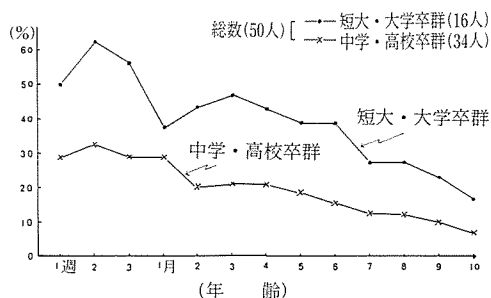


図5 母親の学歴と母乳栄養率との関係

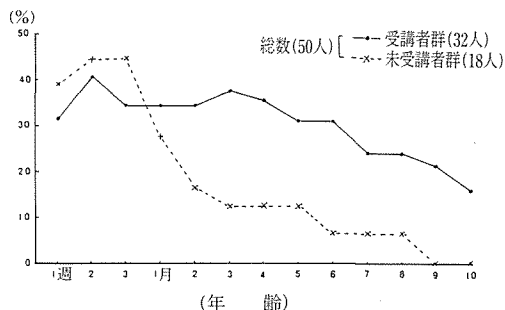


図7 母親学級受講の有無と母乳栄養率との関係

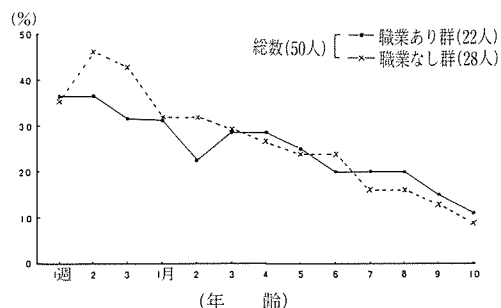


図6 母の職業と母乳栄養率との関係

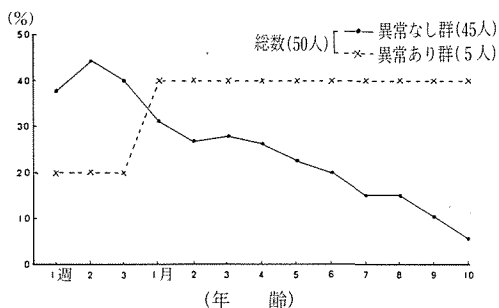


図8 分娩時の母親の異常と母乳栄養率との関係

(57.8%)も最も多く、次いで仕事のため7人(15.6%)、児が好む3人(6%)、児の病気3人(6%)、乳房の異常3人(6%)の順であった。

4. 母乳栄養推進を阻害している要因の分析

1) 母親自身に関する要因

i) 母親の学歴と母乳栄養率との関係

全期間を通じて母乳栄養率は短大・大学卒群の方に高かった(図5)。

ii) 母親の職業と母乳栄養率との関係

母乳栄養率は職業をもっている母親よりも職業をもっていない母親の方に、生後2~3週でやや高かったが、それ以後は両群間にほとんど差が認められなかった(図6)。

iii) 母親学級受講の有無と母乳栄養率との関係

分娩施設・保健所で行われている母親学級に1回以上出席したことがある者を受講者とし、全く受講したことのない者と比較すると、未受講者の母乳栄養率は生後1ヵ月から激減し、月齢がすすむにつれて更に低下し、両群間に明らかな差が認められた(図7)。

iv) 分娩時の母親の産科的異常の有無と母乳栄養

率との関係

分娩時の母親の産科的異常については帝切(4例)のみで、例数が少なく比較にならないが、産科的に異常のない群では次第に減少する傾向がみられた(図8)。

v) 母親の年齢と母乳栄養率との関係

母親の年齢を25歳以下、26歳、27歳、28歳、29歳、30歳以上の6段階に区分して、それぞれの母乳栄養率をみると、高率を示したのは25歳以下の若年者であり、最も低かったのは27歳であった。その他の年齢群では生後1ヵ月には母乳栄養率が20%前後まで下がり、それ以後はあまり変動しなかった。25歳以下群のみが生後4ヵ月でもなお50%の高率になっており、比較的長期間高い母乳栄養率を維持していた(図9)。

2) 母親をとりまく環境要因

i) 家族形態と母乳栄養率との関係

夫婦と子供だけの世帯を核家族群とし、それ以外の世帯を複合家族群(調査地区ではほとんど三世代家族であった)として両群の母乳栄養率を比較してみると、全期間を通じて核家族群の方が複合家族群よりも高率であった(図10)。

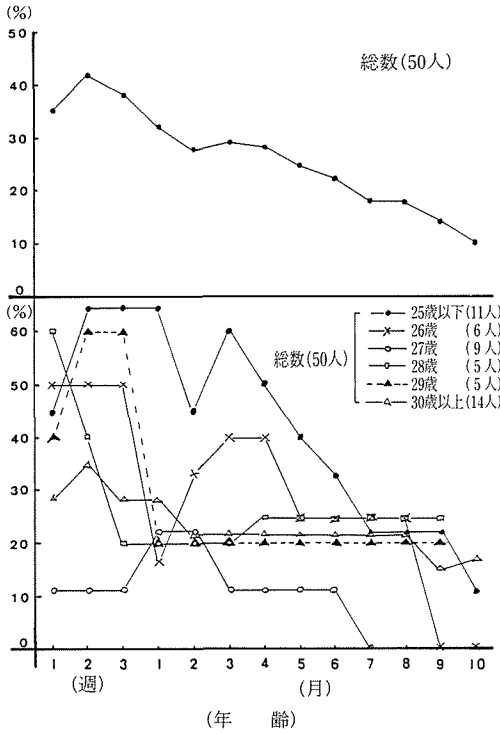


図9 母親の年齢と母乳栄養率との関係

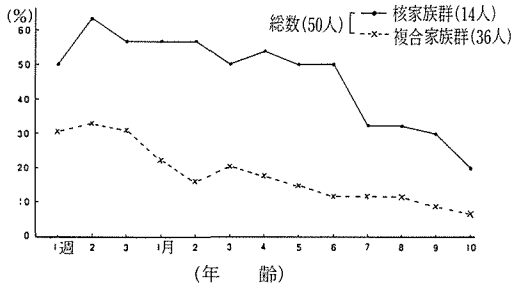


図10 家族形態と母乳栄養率との関係

ii) 分娩施設と母乳栄養率との関係

分娩施設を総合病院群と産科開業医院群とに分けて母乳栄養率を比較してみると、全期間を通じて総合病院群の方が産科開業医院群よりも高率であった(図11)。

iii) 母児同室時期と母乳栄養率との関係

母児同室となる時期は分娩1日～13日(平均3.7日)であった。これを2日未満, 2日以降に分けて母乳栄養率を比較すると、2日未満で母児同室となった群で

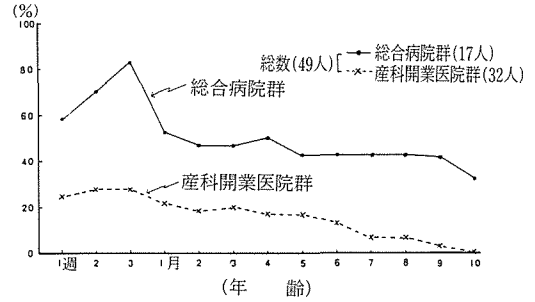


図11 分娩施設と母乳栄養率との関係

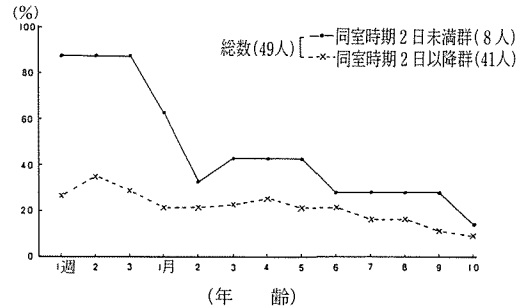


図12 母子同室時期と母乳栄養率との関係

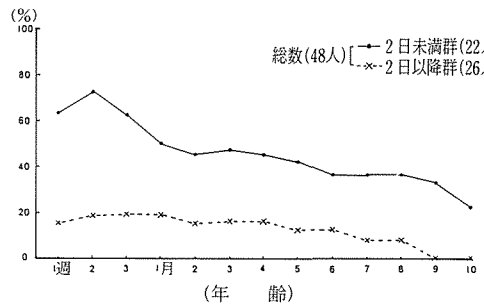


図13 初乳をはじめて与えた時期と母乳栄養率との関係

は全期間を通じて母乳栄養率が高かった(図12)。

iv) はじめて初乳を与えた時期と母乳栄養率との関係

分娩後をはじめて初乳を与えた時期は0～9日(平均1.9日)であった。これを2日未満と2日以降に分けて母乳栄養率を比較すると、2日未満に初乳を与えはじめた群では2日以降に与えはじめた群よりも母乳栄養率が高かった(図13)。

考 察

母乳栄養に関する免疫学的^{1),2),3)} 心理学的^{3),4),5)} 栄養学的^{3),4)} 方面からの研究がすすみ、母乳栄養の意義が再認識され、全世界的に母乳哺育がすすめられてきている。わが国でも母乳栄養率（生後2～3カ月まで）は昭和35年には59.3%前後行われていたが、高度経済成長期の昭和45年には30.4%に減少してしまっ⁶⁾ 昭和55年に厚生省が行った乳幼児身体発育調査によれば、母乳栄養率は生後2～3カ月未満の乳児で40.2%であった。昭和60年の調査⁷⁾ で母乳栄養率は生後1カ月時49.5%、生後3カ月時39.6%とやや増加傾向がみられる。今回、われわれの行った調査では生後3カ月の母乳栄養率がわずか29.2%で、予想に反して低率であった。そこで母乳栄養推進の阻害要因一ことに母親および母親をとりまく環境要因について分析を試みたのでその成績を報告する。

1. 母親自身に関する要因

母親の学歴・職業の有無と母乳栄養率に関して：母親の学歴と栄養法には相関関係がないとする報告⁸⁾ と、あるとする報告^{9),10),11),12)} がある。そして相関関係があるとする報告には高学歴ほど母乳栄養率が高いとするものと、低いとするものの両方がある。今回のわれわれの調査では、高学歴ほど高い母乳栄養率を示した。次に母親の職業の有無と母乳栄養率との関係も、やはり関係ありとする報告^{13),14)} とないとの報告^{8),11)} の両方がみられる。われわれの調査では職業の有無で母乳栄養の継続にはほとんど影響がみられなかった。

これらの要因はその背後にある時代的・社会的条件に影響される部分が大きいために、前述したように調査によって相反するこのような結果がでたものと推察される。したがって単純にこれらの要因のみをとりだして、母乳栄養率を比較してもあまり意味がないことのように思われる。

母親学級受講の有無と母乳栄養率に関して：母乳栄養率を上げるためには母親学級受講が重要なポイントとなるとする論文^{15),16)} は多いが、統計的にははっきりと示されたものはほとんど見当らない。逆に関係ないとする報告^{8),11),17)} がある。今回のわれわれの調査では生後1カ月以降の母乳栄養率が受講者群に高いという成績をえた。しかし、母親学級で母乳のすすめについての教育を受けているか否かの調査はしていないので、その効果があったとは断言できない。むしろ、母親自身の意識の差が母親学級受講に対する行動の差としてあら

われたものにとらえることもできよう。

母親の年齢と母乳栄養率に関して：母親の年齢による母乳栄養率をみた論文は少ない。木村¹⁸⁾ は20～24歳の若年層に母乳栄養率が高いと報告しているが、川崎⁴⁾ 南部⁹⁾ 宮中¹⁹⁾ には有意差がないと報告している。われわれの調査では25歳以下の若年者群が比較的長期間高い母乳栄養率を維持しており、木村らの成績とほぼ一致していた。若年者に高率であった理由として、若年者群に初産者が91%と多かったことといちばん関係しているように思われる。経産者の73%は人工・混合栄養の体験者であり、また初産時期がさかのぼればさかのぼるほど、いわゆる人工栄養全盛時代の影響を受けているために母乳栄養に対する意識の差がかなりあるものと思われる。

2. 母親をとりまく環境要因

家族形態と母乳栄養率に関して、一般に doula としての機能を持った祖母のいる複合家族に母乳栄養率の高いことが報告^{13),20)} されているが、われわれの調査では全く逆の結果を得た。このことは複合家族にも doula としての働きをする人々が少なくなってきたことを物語っていよう。すなわち、形の上で三世同居の複合家族であっても戦前のような家族関係ではなくなってきたことを示しているようである。今日では祖母が育児を含めた家事の先輩として絶対的優位に立ち、指導をしてゆく家族関係ではなくなってきたことが想像される。一方、核家族の場合は母親自身が全責任をもって育児をするという立場にあるため、母乳哺育についても積極的に行動できるためかもしれない。又、核家族の場合、父親が doula 的な働きをする傾向にあるようである。

分娩施設と母乳栄養率に関して：分娩施設が母乳哺育にいかにとりくむかが、母乳栄養率を左右させうる。このことは多くの研究によって明らかにされている^{9),10),11)} われわれの調査でも母乳栄養率は開業産院群よりも総合病院群の方が高い傾向にあった。

母児同室の時期および授乳開始時期と母乳栄養率に関して：施設別の比較をすると、母児同室時期の平均日数は病院群で5日、開業産院群で3日であった。また授乳開始平均日数は病院群で1.4日、開業産院群で2.1日であった。この結果だけからみると、病院群が開業産院群に比べて必ずしも良い状態とはいえない。それにもかかわらず、病院群での母乳栄養率が開業産院群でのそれよりも高率であったのは、母乳哺育に対してスタッフの取り組み方の程度が各々の医療内容に微妙

に影響しているものと思われる。

分娩後、早期に母児を接触させることは母親の母性意識をたかめ、母子相互作用に良い影響を与えることが指摘されている^{21),22),23)}。しかしながら今日でも感染予防、看護管理上の理由などのために出産直後から母児同室にしている施設は非常に少ない。この調査結果からは生後2日未満の早期に母児同室にすることが、生後1カ月までの母乳栄養率をたかめることにつながっていた。しかし、2カ月以降の母乳栄養率についてはほかの種々な要因が関与しているためか、はっきりとした関係を認めることはできなかった。児による母親の乳頭への吸啜刺激が母乳分泌のメカニズムからみてまず第一のステップであり、産後24時間以内からできるだけ早く授乳させることが母乳栄養を継続させるために必要であると、諸家により指摘されており^{4),22)}早期授乳が母乳栄養を高めるとの研究報告は多い。われわれの調査成績では授乳開始時期は0～9日(平均1.9日)であった。生後2日未満の早期授乳では母乳栄養率は全期間を通じて高く、児玉、山内らの報告^{11),24)}とも同様であった。特に2日以降に初乳を与えた群では母乳栄養率は全期間とも20%以下の低率であった。このことから2日未満の早期に授乳させないことが母乳栄養法の確立を阻害している重要な因子となっていると考えられる。

要 約

鳥取県西伯郡日吉津村(人口2,677人)において、母乳栄養推進の阻害要因—母親および母親をとりまく環境要因について分析を試み、次の結果を得た。

1. 母乳栄養率は、生後2週の42%をピークに月齢を追うごとに減少し、生後3カ月29.2%、生後6カ月22.2%と全国のそれを下まわる程の低率であった。

2. 母乳栄養推進の阻害要因のうち母親自身に関するものには学歴の低さ、母親学級の未受講、母親の高年齢(26才以上)などがあげられた。一方、母親の職業の有無は阻害要因にはならなかった。

3. 母親をとりまく環境の阻害要因として複合家族であること、分娩施設が産科開業医院であること、母児同室時期や初乳開始期が分娩2日以降と遅いことなどがあげられた。

本研究をまとめるにあたり、ご協力いただいた鳥取県西伯郡日吉津村役場の保健衛生担当の方に心から御礼申し上げます。

文 献

- 1) 山内逸郎, 産科と婦人科, **42**, 2, 1975.
- 2) 植地正文, 新小児医学大系, **28**, 245～278, 1985.
- 3) 小林登, 周産期医学, **14** (4), 521～525, 1984.
- 4) 南部春生, 周産期医学, **9** (1), 49～56, 1979.
- 5) 平井信義, 産科と婦人科, **42** (2), 137～140, 1975.
- 6) 厚生統計協会, 国民衛生の動向, **32** (9), 109, 1985.
- 7) 日本公衆衛生協会, 公衆衛生情報, **16** (736), 42～47, 1985.
- 8) 川崎幾子, 津金浩子, 岡原勝子, 塩野勝男, 佐藤日出雄, 小児保健研究, **35** (5), 228, 1975.
- 9) 吉瀬美紀子, 児玉和恵, 今村良子, 萩尾安子, 小児保健研究, **29** (2), 88, 1971.
- 10) 白井清夫, 小児保健研究, **20** (20), 91～94, 1961.
- 11) 児玉和恵, 今村良子, 山根多紀子, 小児保健研究室, **30** (4), 174～178, 1972.
- 12) 平山宗宏, 高石昌弘, 高橋種昭, 沢田啓司, 高野陽, 富山富而, 南部春生, 橋本武夫, 石井朗夫, 小児保健研究, **37** (5), 335, 1979.
- 13) 大西まゆみ, 第11回母性看護分科会, 104～107, 1980.
- 14) 丹治信子, 服部秀子, 鈴木フミ, 第12回母性看護分科会, 78～81, 1981.
- 15) 宇座美代子, 日本公衛誌, **27** (10), 333, 1980.
- 16) 狩野フサエ, 梅田和子, 永井貞江, 中川くみ子, 岡部幸江, 清水和代, 飯塚露子, 只木信子, 小平良貞, 保健婦雑誌, **32** (12), 32～36, 1976.
- 17) 福田恭子, 小林たつ江, 立川富美子, 町田弘子, 星野絹枝, 岩崎ハナ江, 諏訪かよ子, 清水春子, 角田ふみ子, 母性衛生, **25** (4), 557, 1984.
- 18) 木村隆夫, 大久保英子, 岩谷和子, 小児保健研究, **24** (3), 90, 1966.
- 19) 宮中文子, 松尾庄子, 加藤順子, 柴田千代子, 高見淳子, 母性衛生, **23** (4), 109～112, 1983.
- 20) 竹内徹, 母乳哺育と母子相互作用, 加藤・平山・小林編, 母乳哺育, p.448, メディサイエンス, 東京, 1983.
- 21) 中島唯夫, 産科と婦人科, **42** (2), 29～33, 1975.
- 22) 澤田啓司, 助産婦雑誌, **38** (7), 16～21, 1984.
- 23) 竹内徹, 周産期医学, **14** (4), 539～543, 1984.
- 24) 山内逸郎, 小児保健研究, **35** (5), 236～238, 1977.

Summary

We analyzed the factors which hinder the breast milk feeding—focusing on mother and her surroundings—in Hiezu, Tottori Pref, and the results are summarized as follows :

1. The rate of the breast milk feeding was lower than that of the average in all Japan. It was highest as to 2-week babies and showed 42%. As months passed by, the rate decreased. As to 3-month babies it was 29.2%, and 6-month babies, 22.2%.
2. The hindering factors of mothers themselves were their lower academic background, and their high age when birth (older than 26 years old.) That they didn't attend the mother class was one of the factors. Whether or not they had some occupation didn't enter the factors.
3. As the hindering factors among their surroundings we can cite the two facts. They are the members of non-nuclear family, and they gave birth in a small local maternity hospital of private practice.
4. That the mothers were 2 days late in living together with their babies and starting breast milk feeding, was also another hindering factor.

(受付 1987. 2. 9)